

開校記念日（創立 135 周年）に寄せて

北海高等学校 校長 秋山 秀司

本来、5月といえば、心浮き立つ新たな学校生活に落ち着きを感じてくるころであり、運動部員はインターハイの予選に向けて最終調整をしているところです。例年、この時期には生徒会主催の選手激励会が催されていますが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の防止から休校期間が延長され、残念ですが、既にインターハイ中止が決定されてしまいました。

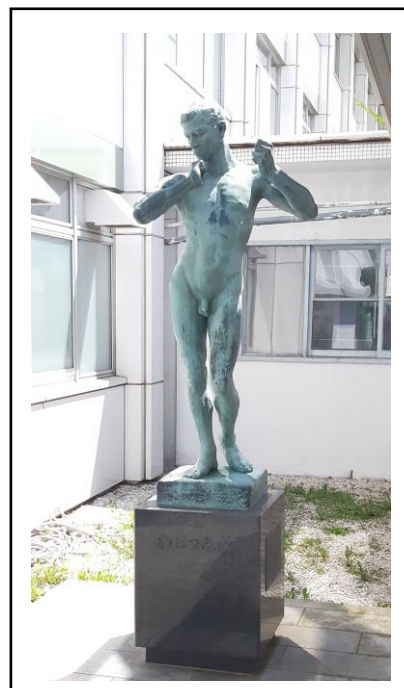
北海高校は、建学の精神である「百折不撓」の気概の下に生徒それぞれが自らの条件にあわせて文武の両道を追求し、自己に磨きをかけることを大切にしてきた学校ですから、部活動や生徒会活動などは大変盛んです。中でも各部の歴史は長く、これまで積み重ねてきた実績により全国に北海高校の名が知れ渡っています。このことは北海に学ぶ生徒、教職員はもちろん卒業生にとっても、とても誇らしいものです。しかし、とりわけいま辛い思いをしているのは、時に涙をこらえ、体も心も鍛え準備をしてきた三年生の運動部員です。三年生諸君の気持ちを考えると言葉になりません。本当に残念で悔しいです。北海生の特徴からいえば、昨年の秋から今日までに、飛躍的に力を伸ばしてきた生徒は大勢いたはずですが、私は選手諸君に、そう簡単に寄り添えるような言葉を掛けられるとは思っていませんが、それでも三年生の運動部諸君にはこれまでの自らの努力を誇りに感じ堂々と胸を張ってもらいたいと思っています。確かに高校三年生のインターハイは人生に一度しかありませんが、いま耐え忍んでいるものは多くの人命を守ることであり、難しい課題を前に社会の一員として協調していることに他ならないからです。

運動部の諸君には、スポーツを通じて培った強い精神力を底力に、次に成すべき事にしっかりと気持ちを切り替えてもらいたい。そして、好きなスポーツを今後も続け、いつかどこかで高校三年時のこの経験が、将来の自分にも、また他者に対しても活かせるものであって欲しいと願っています。私は、今回の試練が皆さんのさらなる人間性の成長に必ずプラスになってくれることを、心から信じています。

さて、今日5月16日は、北海高校の開校記念日です。創立135年を迎えました。4万人を超える卒業生がいる中から、今日は本郷新という彫刻家に関わる話をしたいと思います。

「1985(昭和60)年5月15日、創立百周年を迎えた北海高校の玄関前に、全校生徒が整列した。ブラスバンド部のファンファーレが高らかに鳴り響く。生徒会長らの除幕で姿を現したのは高さ2メートルを超えるブロンズ像。若々しく逞しい青年裸像の迫力に一瞬の沈黙が流れ、次いで大きな拍手が生徒たちから沸き起こった。」(北海学園120年の120人編集室編『百折不撓物語』より)

このブロンズ像は、現在も2、3年生が利用している生徒玄関横に立ち、北海生の登下校を見守っている「わだつみ像」(右の写真)です。ここに建立されて今日で35年が経ちました。作者であ



る本郷新は、1924(大正 13)年に北海中学校を卒業しています。北海道師範学校(現北海道教育大)付属小学校から札幌二中(現札幌西高)に進学した本郷氏は、一度東京に上京しますが、再び札幌に戻って北海中学校に転校しました。北海での生活はわずか一年でしたが、ここでの生活や経験は、その後の人生を決定づけるものになるほど大きな影響を与えたものだと思います。本郷新の次男にあたる淳氏は、父親の生涯を綴った著書「おやじとせがれ」の中で、こう記しています。

「この転校が新に幸いした。北海には美術部『どんぐり会』があった。部員はほとんど油絵を描き、年一回各自の作品を持ち寄った発表会まであったばかりか、親しく部員と美術論を交わすことが出来た。」また、本郷氏自身も「授業を抜け出しては絵ばかり描いていた。どんぐり会で仲間と一緒に絵を描いているうちに絵描きになる気になった。」などと回想しています。まだ中学生でありながら、丸井今井デパートで友人と二人展を開くなど活動的で、既に芸術家として生きていく強い意志が固まっていたことがわかります。

東京高等工芸学校(現千葉大工学部)に進んだ本郷氏は高村光太郎らに師事し、やがて第二次世界大戦(アジア太平洋戦争)を経験します。戦中は自由な彫刻制作は苦難な時代でした。本郷氏はあえて官展(政府主催の美術展)には関与せず、独自の芸術的行動の自覚を主張して新制作派協会彫刻部に所属して制作を続けました。戦後になると日本美術協会の設立に関わり、若手彫刻家の中心的存在となって、美術界の民主化に力を尽くします。それは、戦争中、自由にものを考えることや、表現することが許されなかったことへの反抗でもあり、戦後の民主化の中で、芸術や様々な文化が社会的に保障されるものになることを強く願ったのだと思います。本郷氏は、持ち前の造形力に磨きをかけて、社会性の強い意図的な作品づくりに力を注いでいくようになりました。

例えば、石狩浜に「無辜(むこ)の民」(右写真)という作品があります。昨年 11 月から今年の 2 月まで、札幌市中央区宮の森にある本郷新記念札幌彫刻美術館で、ちょうどその企画展が開催されていました。

「無辜の民」とは、罪なき人という意味です。1970 年に制作されたシリーズで、私たちが当たり前と思っている日常の裏側に存在する「もう一つの現実」の姿を表現したものです。1960~70 年代は、中東やビルマで紛争が激化した時代です。生活が豊かになって



(1981 年設置 石狩市弁天町)

いく一方で、苦難を強いられる人々がいる。そういった人々の声を集約したと言われています。

実は、本校の「わだつみ像」の制作にも大きな目的と深い歴史が存在しています。そもそも「わだつみ」とは、古事記や日本書紀にもみることができる「海神」を意味することばです。今年、終戦から 75 年が経ちますが、第二次世界大戦末期に多くの学徒たちが特攻隊などによって海に散っていったという現実がありました。戦後、戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」を刊行した日本戦没学生記念会(わだつみ会)が、学徒出陣の実相を伝える反戦・平和のシンボルとして東大構内への設置を予定して本郷氏にその制作が依頼されたものでしたが、設置基準に合わないという理由からかなわず、この像はその後も苦難の道を歩むことになりました。このような歴史を持つ像が北海高校にあるのです。

それにしても、本郷氏は、なぜ戦没学生の悲惨な姿を強調しようとはせず、逞しい健康な肉体を持つ青年像としたのでしょうか。それは、かつて本郷氏自身が、北海高校の生徒に向かって、こう説明しています。

「私は、健康な肉体の青年の心の中、肉体の中に悲しみ、怒り、煩悶、そういうものが一つに凝結して欲しいと願った」そして、健康な肉体の青年像に託した平和への想いについて、こう言葉を続けています。「たくさんの若者が命を失いました。『生きたい、生きたい』けれども生きることができなかった。『俺は生きたい』というその声を集約しなければならなかったわけですから」と。この説明を聞いて、改めてこの像を鑑賞すると、人はそれぞれにいろいろなことを感じるでしょう。

現代は、想像以上のスピードで科学技術が発展し、グローバル化が進行しています。地球規模で世界にある課題を解決していこうとする考えに共感できますが、別の側面からみれば利便性が優先されたり、安定的な国際社会を目指すその影に覇権争いなどを感じることもあります。そのような中、現代の私たちは、当たり前のことができることへの喜びや感謝に鈍感になってしまっていないだろうか、「本当の豊かさとは何か」について、あまり積極的に考えることをしていないのではないかと思います。現に私たちも、今回このコロナ禍がなければ、普通に学校に通い授業を受け、部活動にも打ち込んでいたと思います。しかし今は、「みんなと一緒に勉強がしたい」「すきなスポーツがしたい」けれどそれができない。複雑な気持ちで生活をしている中で、「自由と正義の大切さ」や、「平和な状態へのあこがれ」を求めていることを強く感じます。今回の休校中、私は何度か「わだつみ像」の前に立ちましたが、苦しいことがあっても「歴史に学び、強く生きよ」というメッセージが聞こえてきたように思っています。

本郷氏は、短くはあったけれど、北海での生活の中で「質実剛健・百折不撓」の建学の精神をよく理解し、美術部『どんぐり会』を中心とした友人関係の中で「思いやりのあるやさしい心」、「自由と正義と平和を尊ぶ心」を備えられた先輩であったのだと感じます。そして、母校に「わだつみ像」を建立するにあたり、北海に学ぶ者こそ(後輩たちには)、これらの心をしっかりと養い、社会や自分の人生を豊かにして欲しい、そう願っていたのではないのでしょうか。

これからも「わだつみ像」は北海生を見守り続けていきますが、北海生である皆さんも本郷新が私たちへ伝えようとしているメッセージを、時々この像の前に立って受けとめてもらいたいと思います。私たちの心の状況に応じて、様々なことを教えてくれるのではないかと思います。



(2020年5月15日 本校中庭の桜)